

令和 4 年 6 月 25 日現在

機関番号：30116

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2021

課題番号：18K12504

研究課題名（和文）7～12世紀における東アジア医療交流史の研究

研究課題名（英文）A study of the relationships between medicine and international exchanges in East Asia during the 7th to 12th centuries

研究代表者

篠崎 敦史（SHINOSAKI, ATSUSHI）

札幌国際大学・人文学部・講師

研究者番号：90786899

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、7～12世紀の東アジアにおいて、中国医学がいかなる形で日本を含む諸地域を結びつけていたのか、その外交・交流機能について明らかにすることを目的とした。

本研究の成果は、中国医学が東アジア王権間の外交で生じる問題、文化的摩擦を緩和させる機能を持っていたこと、中国医学が各地の王権の権威を荘厳化するとともに、国内の儀礼・官司運営・対外遣使などの広範囲とかわり、そこでは東アジアの薬材が多く必要とされていたことを構造的に解明したことに求められる。これらの分析によって、医学が持つ外交機能の内実にとともに、従来とは異なる視点から東アジア交流史の一端を復原することに成功したと結論づける。

研究成果の学術的意義や社会的意義

前近代東アジアにおいて中国医学は中国のみならず、日本、朝鮮半島、ベトナムなど、広域で受容され、影響力をもった。ところが、従来の対外交史の文脈では医学関係史料が用いられることは少なかった。本研究はこのような研究の空白を埋める形で、東アジア交流史の中に医薬関係史料をある程度定置することが出来た。このような事実は、今後の研究に寄与するものと思われる。また、本研究は遣唐使や日本・渤海関係、国内官司などが必要とする薬物と東アジアの関係性について分析をしたことから、日本史のみならず、東洋史や医学史など、隣接する学問分野への接続とその基礎作業としての社会的意義を持つものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the functions of Chinese medicine in East Asia from the 7th to 12th centuries, and in what ways it connected various regions, including Japan. The study results were as follows:

(1) Chinese medicine functioned to alleviate problems and cultural friction arising in diplomacy between East Asian nations. (2) Chinese medicine was involved in a wide range of areas, including in the daily lives, rituals, domestic rule, and foreign missions of monarchies in various regions. These matters required East Asian medicinal materials.

We conclude that our analysis has provided a realistic picture of East Asian exchanges, one that differs from those seen in diplomatic, economic, and religious exchanges.

研究分野：日本古代史

キーワード：日本古代史 東アジア 医療史 グローバルヒストリー 遣唐使 遣新羅使 遣渤海使 延喜式

## 1. 研究開始当初の背景

7～12世紀の東アジア交流史は、従来、7～9世紀の外交から10～12世紀の交易・宗教交流へ移行するとの図式を中心に検討が行われてきた。研究史の厚い、遣唐使・日宋貿易・求法僧及び巡礼僧などはその代表例である。一方で、これらの研究は類似のテーマを扱うという特性から、それらの事象に位置づけられない事柄については検討が手薄なままであった。その一つが対外交流史の文脈における医療関係史料の分析である。むろん、古代日本医学が中国医学に範をとったことから、これまでも国際交流の視座がなかったわけではない。しかしその検討は医療史の範疇にとどまる傾向が強かったことは否めない。他方、かつて拙稿「高麗王文宗の「医師要請事件」と日本」(『ヒストリア』248、2015年)で触れたように、東アジアの外交・交流の中ではしばしば中国医学に関する事象がみえる。なぜ外交や国際交流の文脈で中国医学がみえるのか。そして中国医学は、対外交流史上、いかなる機能を持ち、それがどのように日本を含む東アジア地域を結びつけていたのか。これが研究の端緒と本研究を貫く問いである。

## 2. 研究の目的

上記1の視座のもと、本研究は7～12世紀における中国医学の持つ外交・交流機能の分析と、そこから浮かび上がる東アジア交流の様相に迫ることを目的とした。

前近代東アジアにおいて、中国医学は“グローバル・スタンダード”として機能をしていた。中国医学はその中心地の中華王朝はもとより、朝鮮半島、日本列島、ベトナムなどの東南アジア、中央アジアなど、広範な範囲で普及をした。また、そこで使用される薬材は、ユーラシア全域及び海域世界で流通していたものであった。そのため、中国医学とそれと関わる事象は、必然的に国際色豊かという特性を有する。

一方、これと深く関わる東アジア国際交流においては、王権の存在感が圧倒的である。遣唐使をはじめとする、国家間の使者派遣とそれともなう物品・知識交換はその代表例である。中国医学の体系的導入や高級貴重薬材の安定的な供給には、少なくとも9世紀まではこのような王権間の外交を経由することが不可欠であった。古代日本は遣唐使などの派遣を9世紀を最後に行わなくなるが、中国と朝鮮半島などの間では、7～12世紀の間、ある程度継続的な国家間の使節往来が維持されていた。また、従来、“民間(私)”の動きであるとされてきた日宋貿易についても、近年では王権の管理・関与を前提とするものであったことが明らかにされている。9世紀以降盛んになる巡礼僧などの仏教交流も王権の支援のもと、“民間(私)”の交易ルートを利用したものであった。これら日宋貿易を含む海上貿易・海域交流においても、中国医学知識(医薬書)や薬材が交換されていたことが確認出来る。

これら外交と交易・宗教交流が錯綜する7～12世紀の東アジアにおいて、中国医学はいかに日本と中国、朝鮮半島、渤海などの地域を結びつけ、各地の歴史的展開に影響を与えたのか。このような観点からの考察によって、既往の対外交流史像では見落とされてきた事象を復原するとともに、これまでとは異なる交流の内実にも迫ることが出来るとの見通しを得るに至った。

上記が本研究の目的と問題意識である。

## 3. 研究の方法

本研究は文献調査、先行研究の成果をふまえた医学関係史料の収集・分析、関係地点のフィールドワーク調査、研究機関所蔵資料の収集・分析をその活動の中心とした。これをふまえ、具体的に実施した分析手法・視座は下記である。

### (1)中国医学分析の前提として、日本と中国、朝鮮半島の外交・交流の全体像を整理

これについては、本研究活動以前より実施してきた内容のため、本研究では補助的な位置づけとなる。ただし、中国医学分析の要である日本と宋の交流について、その全体像と時期的な違いを明らかにすることは、議論の前提として重要であったと考える。

### (2)対外交流史の文脈における医療関係記事の収集・整理

日本・中国・朝鮮半島などを中心に、東アジア広域で活動する医療従事者、薬材の流通、医学知識(医薬書など)の利用や伝播についての情報を整理した。これをふまえ、古代日本における交流と医学の関係、対外交流における中国医学の機能について分析を行った。一方、日本以外の地域(中国、朝鮮半島など)の事象については、2020年度からの感染症の流行により、十分な調査が行えなかった部分があり、検討対象を日本を中心とするものとせざるを得なかった面がある。

### (3)比較の視点 地域間交流における薬物の利用実態の有無、薬材の入手経路(国内・国外いずれか)など

中国医学が各地域との交流にどのように作用したのか、その点を明確化するため、比較の視点

を導入した。具体的には、遣唐使・遣新羅使・遣渤海使の使用薬物を整理、比較し、特定の国との交流にしか使用しない薬の特定とその利用実態を浮き彫りにする、古代日本が恒常的に使用する薬材の入手経路が国内、国外のどちらであったかについて特定し、どのような面で東アジアとの交流が必要であったのか鮮明にする、という点である。

#### 4. 研究成果

本研究課題の主な研究成果は、論文4本(図書1つ含む)、学会報告4件となる。

以上をふまえ、研究活動の全体的な成果を以下、述べる。

##### (1)日本・中国の交流の全体像と転換点の精緻化 3の(1)の研究成果

中国医学を論じる前提として、日本と中国の外交全体を整理、分析を行い、日中交流の質的転換についてその精緻化を試みた。従来、遣唐使の派遣消失などを分水嶺とする日中外交の質的転換は指摘されていたが、その後の展開については不透明な部分が多かった。本研究はその不鮮明な部分について、全体的な事例収集を行い、モデル化をはかった。その結果、僧の持つ交流機能が大きく転換することを明らかにした。本成果によって、院政期における院(治天の君)周辺に医学書がみえることや、国際交流を媒介した僧侶が中国医学にも造詣が深いことなどについて、このような日中外交の質的転換が影響を与えていた可能性があるとの見通しを得るに至った。

##### (2)東アジア国際交流の脈絡における中国医学・薬材の機能の解明 3の(2)、(3)の研究成果

遣唐使など、古代日本の遣外使節がいかなる国内外の薬物に支えられていたのかについて、その全体像を整理、分析を行った。検討によって、日本と唐・新羅・渤海との交流が天皇の国内支配と君主間外交の成果に支えられていたことを浮き彫りにした。具体的には、ある国から入手した薬物が、ほかの国との交流とも結びついているという重層性である。これら遣外使節は9世紀に順次、派遣がみられなくなるが、ほぼ同時期に対外交流は7~9世紀の外交から10~12世紀の交易・宗教交流へと変貌する。このような対外交流環境の変化は、外交面のみならず、東アジアの薬材を必要とする方面にも影響を及ぼした可能性がある。

##### (3)東アジア王権間外交・交流における中国医学の機能の解明 3の(2)、(3)の研究成果

遣渤海使のみが持っていく薬物について分析を行い、「食」に関するものが多い点にその特質が求められることを明らかにした。この背景には、渤海が肉食中心の食文化を有しており、古代の日本の人びとにはこの点が交流上の大きな障壁であったことがあると思われる。また、唐、新羅には類似の薬物を使用していないことから、古代日本の対外交流は多様なもので、とりわけ渤海との交流には唐、新羅との関係にはみられない、個別の問題を抱えていたという事実を突き止めた。この分析を通じ、中国医学はこのような国際的な交流の際に発生する文化的な摩擦も緩和する機能があることを明確にした。

##### (4)薬材の入手・消費状況から東アジア国際交流の内実と変遷を跡づけ 3の(2)、(3)の研究成果

古代日本国家が、毎年、恒常的に必要とする薬にはどの程度、東アジアの薬物が使われているのか、換言するのならば、どの程度、東アジアとの交流を必要としていたのかという点についてその全体像を明らかにした。その結果、古代の日本は、恒常的に必要となる薬については、基本的に国内から入手出来る薬材を中心的に準備されており、一部、東アジアから入手した貴重薬材を天皇と貴族層などの限られた階層が消費するという特質を持つものであったことを鮮明にした。また、このような様相は10世紀以降、縮小傾向へと向かうとともに、「私的」な用途に類する薬物・香薬などを海商から購入するというものへと変化していったことも跡づけた。

##### (5)日本を中心とする新たな中国医学の受容実態の分析 3の(2)、(3)の研究成果

唐代に編纂され、皇帝の権威とも深くかかわった『新修本草』を古代日本がいかに受容したのかについて分析を行った。その結果、唐代に追加された新しい西域・南海産の薬物についてはほとんど受容されておらず、同書の利用実態はそれ以前の本草書所収の薬物中心であったことを突き止めた。事実、先の4の(4)で指摘したように、古代日本朝廷が恒常的に必要としていた薬材は、大部分が日本列島の産で、一部、東アジアの薬材を使用するというものであった。このような構造が、唐代以降の新しい中国医学の受容の低調さの遠因にもなったと思われる。

##### (6)日本以外の中国医学と東アジア交流の史的意義の分析：高麗を中心に 3の(2)、(3)の研究成果

日本以外の地域については、高麗を中心とする分析を行った。10~12世紀の高麗は、宋・契丹・女真などと密接な関係を有していたが、これらの勢力との交流の際、しばしば医学にかかわる事象がみられる。代表例は、契丹圧迫下における宋との医学交流や中国系海商を介した中国医学の摂取、医師による国際的な情報収集などである。これらの事例分析を通じて、高麗王朝は中国医学を単に医療として利用するのみならず、それらを通じ、国際交流の円滑化や王の国内権威

増大などを目指していたとみられる。一方で、高麗で看取される事象は同時期の日本ではあまりみられないものがある。このことから、中国医学は東アジア広域で普及するとともに、各地の王権・地域による取捨選択など、地域性を持つものでもあったと考えられる。

以上のように、各地域の特性、そこにおける中国医学の取捨選択はあるものの、7～12世紀の東アジアにおいて、中国医学は外交で発生する問題を緩和する機能を持ち、王権の国内外の権威を荘厳化するとともに、国内支配を維持・強化する機能も有していた。このような点が東アジア広域で中国医学が共通基盤として普及をし、また、医療を媒介とする国際交流、地域間を結びつける機能につながったと考えられる。

本研究によって、従来、検討が手薄であった医療関係史料を対外交流の文脈で定置することが出来たと結論づける。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 篠崎敦史	4. 巻 58
2. 論文標題 平清盛の対宋外交の歴史的位罫	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北大史学	6. 最初と最後の頁 1-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠崎敦史	4. 巻 51
2. 論文標題 遣渤海使の所持雜薬からみた日本と渤海の交流の一断面	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 札幌国際大学紀要	6. 最初と最後の頁 136-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 篠崎敦史	4. 巻 53
2. 論文標題 日本古代朝廷の年間準備薬物と東アジアの薬材	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 札幌国際大学紀要	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 篠崎敦史
2. 発表標題 『延喜式』規定の遣渤海使の所持薬物について
3. 学会等名 肅慎談話会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 篠崎敦史
2. 発表標題 『延喜式』典藥寮式にみえる遣外使節の所持藥物について
3. 学会等名 国書の会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 篠崎敦史
2. 発表標題 「敦賀唐人」考
3. 学会等名 続日本紀研究会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 篠崎敦史
2. 発表標題 日本古代における『新修本草』の受容実態をめぐって
3. 学会等名 続日本紀研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 共著(担当部分は篠崎敦史)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 557(執筆部分は183-215)
3. 書名 東アジアにおける皇帝権力と国際秩序(担当部分は「日本古代の遣外使節と所持藥物」)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------